リストカッタら

津梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リストカッタら

【Ｎコード】
Ｎ０８１８Ｙ

【作者名】
津梅

【あらすじ】
リストカットのような傷跡が仕事中にできてしまった学生の話です。

（前書き）

主人公が自殺したいだの鬱に入る作品ではありません。
短編、文学作品です。

学生と言うは身分の軽いもので、金はなくとも時間はあり、夏に長い休みもあれば、金欠の問題も短期の時給の良いバイトを朝からこなして苦慮にもせず、日々気の揉むところもせいぜい異性のことくらいで、本分を弁えて学業に打ち込むことも、休みとなれば蚊帳の外に追いやって筆をとらなければ本も開かずに忘失のごときである。鈴木という男もその例にもれず、この男、百七十後半の長身で無駄な贅肉もなく、顔の作りも御でこが狭く、頬がややこけたところがあって、眉もきりりとはっきりとして気難しい印象はあっても全体悪くもない。性格は自己の主張は薄くとも律儀の真面目一本と、扱うに易く、任せるに無難なもので、普段勤める夜の居酒屋のバイト先の店長から信頼を得ているが、真面目故に歌舞いたものがないなら、服装は普段より地味なもので、恋人の一つでも作らねばと思えば少しは洒落た格好をと思うことはあっても、手頃に良いものを選ぶ感性に欠けて、そのうちに、まあ、ひとまずはいいかと気にも留めなくなるから、お洒落分野に頓着というものが欠けている。異性にしても、うん、やはり恋人がほしいと思い、所属するテニスサークルの中に想う人がいなくもないが、告白渋って上手く付き合うに到ることもなければ、それにやきもきするも、焦りに駆られて無茶、突進することもない。これまた、ひとまずは友達として、仲間としての距離を保てればよいとする。これは頓着が薄いと言うよりは甲斐性に欠けている。

鈴木の行う夏限定の短期のアルバイトというのは家電配送助手の「横乗り」というもので、箱詰めのテレビやら洗濯機やら冷蔵庫やらを家庭に配送する仕事だが、重いもの、特に冷蔵庫などはものによれば百キロを超えて、二人で持つにも相当にきつい。持ったまま

時に階段を上がり、時にカウンターを越させと腕力、背筋力、腰の力を筋が切れんばかりになることも多々あって、体力に自信がなければまず務まらないが、鈴木は中学、高校時に野球部員として過ごした筋肉の貯蓄のおかげでそこそこに出来る。ただ、夏の炎天下、Tシャツ一枚、腕をむき出しに冷蔵庫の箱を運ぶと、前腕の脈の辺りから肘の内側のほうに到って、箱の角で作った線上の赤い食い込み傷が何本も走り、さも自殺願望者の腕のように痣が残る。これまたリストカットのようだと笑っていられるのは勤務中の頃までで、半日経っても消えず、帰りの電車の中で人目を気にして腕を隠そうにも半袖なら叶わず、腕を隠す代わりに俯いて顔を隠していると、はっと顔を上げたときには前方に座っていたサラリーマンがまじまじと自分の腕を眺めている最中と気が付く。ふと視線が突き合うと相手は気の毒そうに笑って卒方を向いてしまう。それは誤解と胸中に叫んでも解けるものはなく、声にしようにもそれまた奇特と喉の奥に引っ込めて、何もせずとも腕の傷跡だけでばつが悪いと気づくと、本日は極力腕を隠して余計な外出を控えねばと胸で唱える。

ところが、そう決めた矢先ほど時運の悪戯は人を弄ぶもので、同じサークル仲間より飲みの誘いが入って、それも大規模なら意中のあの娘も来るというから易々と断れない。告白渋る甲斐性無しのくせして、側にいられる機会を逃すことは好ましく思わず、反射反応の如き、いや行く、との一言を発して、腕の傷に目を落としてすぐに後悔する。ひとまず駆け足で自宅に戻って着替えを済まし、それもこの夏場に長袖を着用して、これで余計な視線を浴びることもないと信じ込む。暑い中で長袖と言うだけで視線を集めることも盲目と気付いていないから、その胸のざわつきはよほどである。

案の定、酒の席に着くと問われる長袖の理由に、何故それをと今さら慌てて言い訳を考えるが、俄かに思いつくものもなし。正直に話すのも一つの手段も、姑息かもしれないと自ら邪念を作って言う

に遅れ、言う前に、

「何、鈴木君、リストカットでもしたの？」

と、酒の席の酔いのノリの軽さで冗談半分に問うものがあって、それがまた声の大きなものなら他の者数人の注目も浴びて、いやいや違うと手で煽いでその疑念を払い消そうとするが、ひとたび振った拍子に袖がまくれてはらりと腕が露わとなり、いまだ消えずに残っている無数の傷を見つけられると、冗談も的射たものと冗談にならず、触れてはならぬものに触れた気まずさに周りの者の血色が一様に引くのを見る。さて鈴木こそが気まずいものに。すぐに正直に、また気さくにでも傷が出来た理由を話せばいいものを、周りの引き攣った顔の憐れむような雰囲気に呑まれれば、鈴木も苦笑いが先行して、繕う術も忘れ、次に我を取り戻していざ説明しようと口を動かしても、またまたその前に周りの者の一人が、さも鈴木に自殺願望ありきで口を開き、

「最近悩みでもあったのか？　いきなりそんなに傷を作って…　そういえば休みに入ってバイトばかりしているな。借金でも作って、取り立てに追われているのか？」

と、真面目な顔で問うから、ことが深刻に聞こえ、隣の者も、またその隣の者も似たようなことを聞いて、聞いてばかりで返事の隙を与えない。弁解がなければそれこそが真実といよいよ決まりかけたところで鈴木も、それは違うと否定するが、随分と出遅れて勝ち目はなく、傷がついた理由を述べても、下手な嘘と理解してもらえない。却って傷心のほどを大袈裟に汲み取られて同情までされて、次には借金の値を細かく聞かれる始末である。これが周りの者たちの、自分の反応を見て楽しむ悪ふざけの趣半分と鈴木自身もわからなくもないが、根が真面目で正直な男だけにわかっていながらあた

ふたとしてしまう。気がかりなところは、ふざけ半分でも、意中の娘が自殺願望を事実と誤解して、そういった憐れむ目で自分を見やしないか、リストカットをする精神虚弱の男と見やしないか、願うところこの話題が耳に届かず、勝手に飲んでいてくれればとチラリとそちらを見やると、いやいや、やや離れた席よりまじまじと鈴木を眺めて、彼の反応を見定めているから、しばし呆然と彼女の方を見つめ返してしまう。と、周りの者は人の恋心を知ってか知らぬか、ついと急に傷の話題をやめて、閑話休題とそれぞれ自分の酒に戻って各々好きに喋りはじめる。中には遅れて傷の話題に乗ってあれこれといまだ聞いてくる者もいるが、鈴木の返事が生返事になってくるとそのうち拍子抜けと誰も聞かなくなる。その頃には気になるあの娘の方もすでに鈴木から視線を外して目の前の別の女子と喋っているのを見るが、誤解の解消は済んでいなければ、どう思われているのか気になって仕方なし。だが、自ら席を移して彼女に説明しに行くのも変な話で、やきもきとするところに、すでに誰もこの傷を話題にしないのは遊び半分に飽きたというより、彼を自殺願望者と認めてその危うさにこれ以上触れるもただ損と見限られたとの邪念が入って、ならば彼女もそういう目で…　と思うと、一人ちょこんと蹲りながら酒を口に運ぶが、ちっとも美味いとも思わず、ちらちらと彼女のほうを見やっては俯き、この傷を負って不愉快被る本日の我が身の不幸を思って黙然とする。

鈴木のこれまでの人生で自殺の願望などこれ一つと心に顔を出したことはなく、近辺で鬱に沈む者を見たこともなければ無縁の概念。今更願望者の精神を考え、思ってみるが、今日の不遇もあって何かむしゃくしゃとする。この世にリストカットなどがなければこの不安も…　との一念により、自殺願望者の全てが下賤に思えて、それらの心の弱さに恨みの一つも抱きたくなる。また手首を切っていまだ生きてしまっている人の境遇をそれなりに知って、尚さら自殺願望の意義に理解が出来ず、そんな不生産の独りよがりの果てはただ

虚しいだけの孤独と発見して、それに自ら向かうを馬鹿と断言して同情もしない。

こういったことを一人考え、責任転嫁のようなことを展開していると、酒の席もいつの間にかお開きとなり、二次会のカラオケへと向かうことになる。その道中、不意と気になるあの娘と歩を並べることになって、どきりとしているところに、これまた不意に、

「鈴木君、本当にリストカットしたの？」

と、問われると顔も耳も赤くして、

「いや、いや、いやいや、そんなまさか、これはただ、ただバイト先で箱を持った時に…」

あたふたと説明するが、信じてもらえたかどうか、彼女は澄ました顔で二、三、頷いて何やら思念を始める。その沈黙が鈴木には余計な緊張を植え付けて、次に何を言われると身構えてしまうと、しかし、次の言葉は意外なもので、

「なんだ、ちょっと仲間だと思ったのに…　でも、考えてみると鈴木君に限ってそんなことはしないよね」

「それはどういう…　もしかして、君自身、自殺を考えたことがあるとか？」

恐る恐る訊ねてみると、彼女の方も恐縮とばかりにゆっくりと頷く。

「もう二年も前の話だけどね、一度だけ手首を。傷も、もうだいぶ

消えてしまったけど…」

と、今度はにんまりと悪戯っぽく笑う。

何を求めてのこの告白か、慮るもすぐには見当もつかず、何より意中の彼女が下賤や馬鹿と断じた自殺願望者だったと知って、何をどう返事をしてよいのか、顔の赤みは引くことも覚えず、しまいには唇が震えだして、こちらは紫色に変色する。酔いもあってか吐き気もして、それをぐっと堪えて、唾とともに一飲みすると、さて、自殺願望者へのむしゃくしゃもひとまず考え直して、己の本日の精神の経験と照らし合わし、一つ同情なども持ち込んで、願望者とそれに準ずる目の前の彼女のことを深く受け止めようと、

「自殺したいと思う人の気持ちは正直まだはっきりとわからないけど…　でも」

との前置きをして、じくと彼女の話を聞いてみようとするのであった。

＜了＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0818y/

リストカッタら

2011年10月31日02時29分発行